

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00241

研究課題名(和文) 触覚的イメージに基づく彫刻表現へのアプローチ 触れる鑑賞の指針提起に向けて

研究課題名(英文) Practical Research on the Approach to Sculptural Expression Based on Tactile Imagery, and Towards Proposing Guidelines for Touch-based Appreciation

研究代表者

宮坂 慎司 (Miyasaka, Shinji)

筑波大学・芸術系・助教

研究者番号：00637150

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、触覚性に主眼を置いた彫刻表現研究や、国内外の触れる鑑賞支援の実践に対する調査、触れることを前提とした展示及び鑑賞支援の実践を通して、「触覚的イメージ」を内包する彫刻表現の在り方と、触れる鑑賞の展開可能性を模索してきた。表現研究の成果としては、モルタルと石膏の混合材による素材転換と直付け制作法を技法として深め、触れる鑑賞に堪える彫刻表現の実践例を示した。調査においては、1960年代後半から始まる日本の触れる鑑賞支援の特殊性について焦点を当てることができた。これらを踏まえた展示と支援の実践では、「触覚的イメージ」における制作痕の重要性と、積極的関与且つ寄り添う姿勢の肝要さを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は制作実践者の視点を踏まえ、触れる美術鑑賞の足掛かりを築くものである。表現研究の成果は、新たな技法論の確立と、作家ごとに意味合いの幅を有する「内触覚」に対して一考を示すものとなる。日本の触れる鑑賞の歴史は欧米と比べて特殊性を有するものであり、また、実践の蓄積も多く、これを発信していくことで、国内外におけるミュージアム・アクセシビリティの向上への寄与が期待できる。展示や鑑賞支援の実践を踏まえて行う研究は、触れることへの障壁が高くある国内の美術館への前例を示すものとなり、今後、触れてもよい作品と触れるべきではない作品の選定や、鑑賞者への関与の在り方を考えて行く上で意義を有する。

研究成果の概要(英文)：In this research, through sculptural expression studies focusing on tactility, surveys on touchable appreciation support practices, and the practice of exhibits and appreciation support assuming touch, the nature of sculptural expressions incorporating 'haptic images' and the potential for developing touchable art appreciation were explored. As a result of the expression studies, material transformation using a mixture of mortar and plaster and the technique of direct attachment were deepened, presenting practical examples of sculptural expressions that withstand touchable appreciation. In the surveys, the focus was drawn to the uniqueness of appreciation support in Japan, which began in the late 1960s, highlighting its characteristic features of artists' autonomous activities. Based on these, in the practice of exhibits and support, the importance of production traces in 'haptic images' and the necessity for active involvement along with a supportive stance were confirmed.

研究分野：彫刻表現研究

キーワード：触れる鑑賞 触覚的イメージ 彫刻表現 素材感 テクスチャ 鑑賞支援 タッチツアー ミュージアム・アクセシビリティ

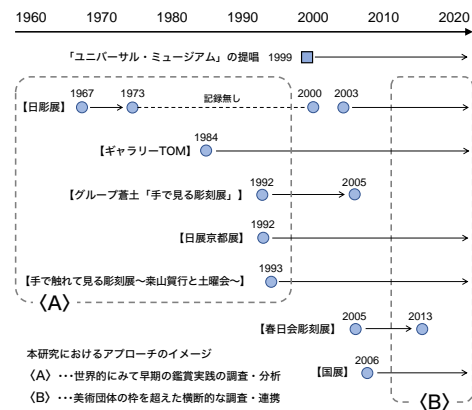
科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、バリアフリー化の流れの中で視覚障がい者を対象とした美術鑑賞の機会が増えてきており、特に2000年代以降この動きは拡大している。美術館などにおける作品に触れることのできる展示は「Touch Exhibitions」と呼ばれ、1960年代後半から1970年代に掛けてアメリカやベルギー、イギリスなどで始まった。規模の大きな触れる彫刻展としては、1976年にテート・ギャラリー（イギリス）で開催された展覧会などが挙げられ、エドガー・ドガ、ジェイコブ・エプスタイン、ヘンリー・ムーア、バーバラ・ヘップワースといった作家らの彫刻作品が具象表現から抽象表現へと順を追う形で展示された。

一方日本では1984年、Touch Exhibitionsの草分け的存在であるギャラリーTOMが東京渋谷に開館し、佐藤忠良、堀内正和、清水九兵衛など著名な彫刻家はその活動に協力したことはよく知られるところである。しかし、それより以前の1967年から、日彫展（日本彫刻会主催）では盲学校と連携した鑑賞の取組を行っていた。Touch Exhibitionsの黎明期において、日彫会は大規模な活動を展開していたと見ることができる。さらに、1990年代以降は、日展（日展主催）や国展（国画会主催）などの美術団体展を始め、彫刻作家らによる実践も見られ、日本における触れる鑑賞支援の経験の蓄積は、世界的に見ても豊かであることが予想される【図1】。それらを横断的に繋ぐ調査や連携が十分なされていない点は、現状の課題として捉えることができる。

研究代表者は2008年以降、日彫展をはじめとした自身の出品する彫刻展において視覚障がい者の鑑賞支援に携わってきた。そのなかで体験的に得た「触覚が彫刻表現の感受に寄与する」という仮説に基づき、視覚障がい者を対象とした対話型鑑賞支援の実践を重ねている。また、制作発表においては、第44回日展（日展主催、2012）出品作品以降、モルタルを用いた独自の素材感による彫刻表現研究を継続して行っている。モルタルと石膏の混合材（以下、モルタル石膏）への素材転換と、直付け制作を含む造形は新たな彫刻技法研究の試みであり、これらの制作活動はいずれも触覚性と密接に関連するものであると省察するに至った。彫刻芸術における素材感と形態、テクスチャは触覚性と密接な関係にあると考えられ、本研究では表現研究・調査活動・展示及び鑑賞ワークショップを一連のものとして捉える研究デザインを意識した。



【図1】日本における触れる彫刻展開催の動き

2. 研究の目的

本研究は「触覚的イメージ」をキーワードとして、制作実践者の視点を踏まえ、触れる美術鑑賞の足掛かりとなる研究基盤構築を目的としている。本研究は下記(1)～(3)を活動の柱としており、視覚に障がいのある研究者と協働しながら実践を重ね、将来的には様々な鑑賞支援の場面に有益となる触れる鑑賞の指針の提示を目指していく。

- (1) 触覚性に主眼を置いた彫刻表現研究
- (2) 国内外の触れる鑑賞支援の実践に対する調査
- (3) 触れることを前提とした展示及び鑑賞支援の実践を研究活動

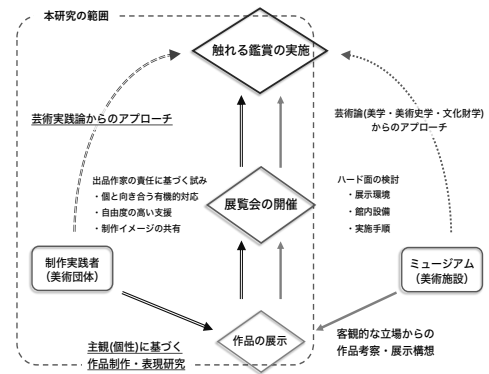
前記の通り、世界の「触れる鑑賞」は1970年代初頭から広がりを見せる。例えばアメリカでは、1973年に制定された「リハビリテーション法 第504条」をきっかけとして、鑑賞支援プログラムが立ち上げられ、言わば制度の後押しの中、こうした動きが確かなものとなっていく。対して日本では、それより前の1960年代の後半から、彫刻家集団と盲学校とが連携した取り組みが行われていた。しかし、作家らが主体となっていた活動は、積極的にその方法論が記録化されたり情報発信がなされたりすることもなく、具体的な成果がまとめられることはこれまで無かったと言っても差し支えない。こうした作家らの動きが、どのような意義を有していたかを明らかにしていくことは、日本の触れる鑑賞支援の在り方の特質に迫ることにも繋がる。

美術鑑賞は一般的に視覚優位のもとに行われるが、立体を扱う彫刻家は形に触れながら制作を行い、視覚のみならず、触覚からも着想を得て作品をつくる。ゆえに、鑑賞においても「触る」という行為は、彫刻制作活動のイメージの得上で有用な手段となることが期待できる。本研究では、制作実践者だからこその視点で触れる鑑賞支援の発展に寄与することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、触れる美術鑑賞の在り方について芸術実践論からのアプローチを行う【図2】。前項で記した活動の柱となる調査・研究を深めていくために、制作実践を行う各美術団体展の出品作家や、触れる美術鑑賞の実践者と連携し、下記(1)～(4)の活動に取り組んだ。

- (1) 素材感・形態感・質感(テクスチャ)に焦点を当てた表現研究と、モルタル石膏を用いた直付け技法の確立を目指した制作実践
→ モルタル石膏の彫刻材としての適性を考察するために、テストピースを作成し、圧縮強度及び切削性を確認した。モルタル混合比率の変化による作業性の差異を検証し、実制作を通して彫刻技法としての可能性を探究した。



【図2】本研究の範囲とアプローチ

- (2) 特異なテクスチャ表現をみせる彫刻作家の調査と、特にその石膏原型に対する熟覧調査
→ 原型を塑造で制作する作家に焦点を当て、石膏原型の痕跡を詳細に観察した上で、特に素材感に関するその作家の造形思考を検証した。塑造による原型を制作した後に、ブロンズを最終素材とした淀井敏夫と、木彫を最終素材とした長谷川昂の作品の調査を行った。
- (3) 国内外における視覚障がい者への鑑賞支援活動の調査と、アクセスプログラムへの参加
→ 視覚に障がいのある研究者とともに、作品に触れることのできる展示や、美術館等が実施するアクセスプログラムへ参加し、その特色を考察した。また、早期から鑑賞支援を展開した日彫展やグループ蒼土の活動を調査し、記録としてまとめた。
- (4) 各美術団体展の若手作家を横断的に繋ぐ展覧会の実施、及び触れる鑑賞の機会の拡充
→ 視覚に障がいのある研究者や、触れる美術鑑賞の実践を行う研究者と連携しながら、視覚特別支援学校の児童生徒を対象とした制作及び鑑賞ワークショップの実践を重ねた。展示協力を得られる施設と協働して、経験を共有するための展示の場を創出した。

4. 研究成果

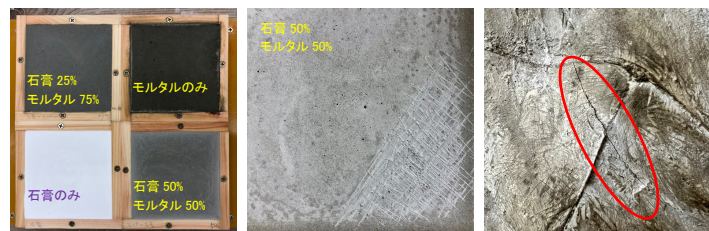
本研究の成果として、以下の成果を得た。

- (1) 彫刻材としてのモルタル石膏の活用可能性の考察、及び材の特性を活かした作品の発表
モルタル石膏が彫刻造形素材としての実用性を有しているかを確認するため、小片テストピース(10×10×20mm)による圧縮強度の比較【表】と、平板テストピース(90×90×10mm)【図3-1】による切削性の検証を行った。石膏はその種類によって混水比が定められているが、彫刻造形(特に型取り作業時)においては一般的にその都度混水量を計測することなく、「水に石膏を加えて沈殿が水面に達するまで加える」方法がとられている。【表】の「石膏(a)」「石膏(b)」は、それぞれ異なる人物が溶いた石膏から作成したテストピースとなるが、強度に差異が生じていることも確認できる。石膏とモルタルを混合した材では、混合比による大きな差異は認められないものの、石膏と同程度以上の強度が得られており、石膏と同様の造形に耐える材であることを確認した。

【表】モルタル・石膏混合材(乾燥後)の圧縮強度の比較

同一材による小片テストピースは5つ用意し、その平均値を算出した。

No.	石膏(a)	石膏(b)	石膏75% モルタル25%	石膏50% モルタル50%	石膏25% モルタル75%	モルタル
①	17.1	12.4	24.1	23.2	19.2	42.7
②	18.5	12.3	19.4	20.7	22.9	30.7
③	17.8	12.7	20.2	21.8	24.2	27.6
④	21.9	13.5	18.7	21.5	18.2	24.4
⑤	18.0	13.4	21.5	23.0	24.3	35.3
平均	18.7 (MPa)	12.9 (MPa)	20.8 (MPa)	22.0 (MPa)	21.8 (MPa)	32.1 (MPa)



左より【図3-1】モルタル・石膏混合比を変えた平板テストピース(硬化直後)

【図3-2】モルタル混合比50%の平板テストピース表層の彫刻痕

【図3-3】作品表面に現れたクラック(赤印部分内側)

平板テストピースでは、より実用の場面を想定し、溶く前の石膏とモルタルを混合し、硬化後直付け制作を行うタイミングで、大理石用の彫刻ヤスリを用いてその切削性を検証した。モルタル50%では鋭利な彫刻痕【図3-2】であったが、75%では彫刻痕が鈍くなり、表



左より【図4-1】《shell - ii》, 宮坂慎司, モルタル・木, h.206cm×w.55cm×d.37cm, 第49回日彫展, 西望賞, 2019
 【図4-2】《singing shell - ii》, 宮坂慎司, モルタル・木, h.181cm×w.69cm×d.77cm, 改組新第6回日展, 2019
 【図4-3】《singing shell fragment - ii》, 宮坂慎司, モルタル, h.138cm×w.60cm×d.60cm, 改組新第7回日展, 2020
 【図4-4】《singing figure》, 宮坂慎司, モルタル・木, h.167cm×w.53cm×d.31cm, 第9回日展, 2022
 【図4-5】《singing figure ii》, 宮坂慎司, モルタル・木, h.163cm×w.45cm×d.43cm, 第52回日彫展, 2023

層の造形は甘くなることが確認できた。モルタルの混合比が大きくなると、モルタル中の骨材がヤスリがけの難しさの要因となるため、カービングを想定したモルタル石膏の直付け技法では、50%程度以下に抑える方が造形面でのメリットがあると考察した。なお、カービング時の摩擦が大きいため、継続的な直付け制作では、より硬質なカーバイドヤスリの使用が適している。

モルタル石膏の経年変化については今後の更なる観察を要するが、制作から5年以上が経過している作品においても劣化を感じさせる大きな変化は認められない。しかしながら、作業性の向上を意図して混水量を上げた作品では、硬化後の乾燥の過程でクラックが生じる例もあった【図3-3】。溶いた際の硬化時間についても、モルタルの種類や混合比、混水量によって大きく異なるものであるため、型取り作業以前に、それらの点を考慮した確認作業を行う必要はある。

モルタル石膏材の特性を活かした制作実践の成果としては、2019年から2023年までに9点の作品を発表した (<https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000004120> 参照)。主要な作品は、【図4-1】～【図4-5】に示す通りである。これまで自身が制作してきた石膏よりも、モルタル石膏による作品は硬質で重厚感のある表現となり、カービングの難しさはあるものの、研磨した密な部分と粗の部分の対比が表しやすく、彫刻素材としての可能性を実感することができた。

(2) 原型制作の痕跡にみる「素材感が導く彫刻造形」に関する考察

造形材料と作家（淀井敏夫、長谷川昂、佐藤玄々）の関わりに焦点を当て、素材感を示すテクスチャは、表面的な様相を示すだけのものではなく、作家にとっては自身の造形の導く要素ともなることを考察した。また、彫刻において素材は、制作行為の間に絶えず作家に関与し続けるものであり、多くの彫刻家たちによって触覚的な芸術として位置づけられている所以もその点にあるという考察を得た。それぞれの制作行為そのものに素材のイメージが内包されているという論考は、彫刻研究誌アートライブラリーNo.22（公益社団法人日本彫刻会刊行）に掲載された。

(3) アクセスプログラムに関する考察と、『視覚障害：その研究と情報』での情報発信

ニューヨークのイサム・ノグチ美術館及びメトロポリタン美術館別館メット・プロイヤーで開催されたアクセスプログラム【図5-1, 5-2】に全盲の研究者とともに参加し、その在り方が日本のプログラムと異なる理念を有する考察を得た。特に、視覚障がい者自身が主体的に参加できるプログラム構成や、エデュケーター及びボランティアガイドの個性を含むタッチツアーの性格、鑑賞者と対話により有機的且つ柔軟に変化していくプログラムの捉え方といった点において有益な学びを看取した。

なお、こうした視察で得た経験は、研究誌『視覚障害：その研究と情報』（以下、月刊視覚障害）内に立ち上げた企画「触れるアート“いま”と“これから”」の中で継続的な発信を行っており、2023年6月現在で、第16回を数える。



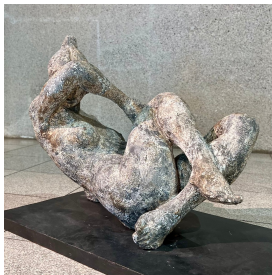
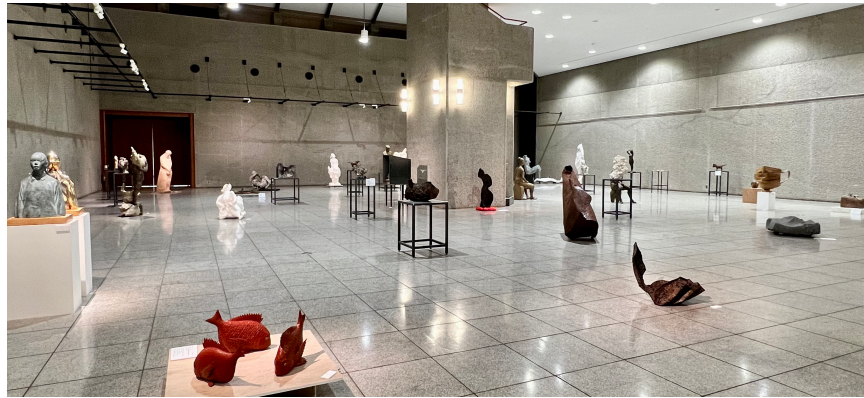
左【図5-1】イサム・ノグチ美術館でのアクセスプログラム, 2019
 右【図5-2】メット・プロイヤー(The MET 別館)でのアクセスプログラム, 2019

(4) グループ蒼土の調査と記録整理

作家らの主導によって1993年から15回に亘って開催されたグループ蒼土彫刻展について、その成り立ちと展開を調査し、展覧会DM【図6】などの記録データの整理を行った。



【図6】
 第1回グループ蒼土彫刻展DM。左から上野、桑山、柴田、中村の作品が掲載されている。



上段左より【図 7-1】「彫刻に触れるとき『さわる』と『みる』がであう彫刻展」ポスター

【図 7-2】 展覧会会場風景，千葉県立美術館第 7 展示室，2023

下段左より【図 7-3】《なくおんな》，上野弘道，石膏，h.90cm×w.110cm×d.70cm

【図 7-4】《海の番人》，栗山賀行，ブロンズ・樟，h.34cm×w.30cm×d.27cm

【図 7-5】《諦観》，柴田良貴，石膏，h.69cm×w.26cm×d.32cm

【図 7-6】《椅》，中村宏，樹脂，h.110cm×w.40cm×d.73cm

(5) 千葉県立美術館と協働した触れる彫刻展の開催、及び関連シンポジウムの実施

全ての人が、全ての作品に触れることのできる展示を企画し、下記を概要とする展覧会を開催した。グループ蒼土創設メンバーの 4 名を含む 13 名の作家による、46 点の作品を展示した。会場では、鑑賞者に対して「作品の触り方に関して」を記した触れる鑑賞メモを配付した。

- ・展覧会名：彫刻に触れるとき「さわる」と「みる」がであう彫刻展
- ・会期：2023 年 2 月 21 日(火)～3 月 19 日(日) 休館：月曜日及び 2 月 28 日
- ・会場：千葉県立美術館第 7 展示室
- ・出品者：江村忠彦、川島史也、小橋暁子、小松俊介、武本大志、樽井美波、廣川政和、宮坂慎司、渡部直、上野弘道、栗山賀行、柴田良貴、中村宏
- ・展覧会協力：半田こづえ、広瀬浩二郎、篠原聡
- ・入場者数：2,916 名
- ・関連イベント：

- ① 制作ワークショップ「ハイ!チーズ!ポーズを決めて彫刻をつくろう!」(2023. 3. 5)
- ② 野外彫刻の鑑賞&メンテナンス「彫刻ピカピカ大作戦」(2022. 9. 3, 2022. 10. 10)
- ③ シンポジウム「彫刻をさわる時間 -『さわる』と『みる』の結節点-」(2023. 3. 18)

シンポジウムには、ユニバーサル・ミュージアムの第一人者である広瀬浩二郎と、グループ蒼土の創設メンバーである栗山賀行を招き、彫刻芸術と触覚的感受の関係に迫る内容を開催した。全盲の研究者である広瀬は、視覚に障害のある鑑賞者の立場から触覚的鑑賞の方法論について述べ、その可能性と、これからのミュージアム・アクセシビリティに関する論を展開した。木彫作家である栗山は、1992 年から継続して行っている作品に触れることのできる展示について、その発端とこれまで継続してこられた所以について述べ、彫刻家が無意識的に有する触覚的なカタチの捉えに関して論を展開した。両氏の講演を受けて、展覧会への振り返りとして、展覧会出品者及び全盲の研修者である半田こづえ氏を交えて討論を行った。互いの知見を共有した上で、鑑賞者と作家、視覚障がい者と晴眼者が意見を交える公開討論を通して、彫刻芸術の触覚性に迫り、彫刻芸術における触覚的イメージのあり方について考察を深めた。

(6) 視覚特別支援学校が参加する“触れる”作品展の実施

2020 年から、視覚特別支援学校と連携したワークショップを行い、2023 年 1 月までの間に、視覚特別支援学校児童・生徒のアートメダル作品を展示する展覧会【図 8】を 9 回開催した(『ART WRITING No. 16』参照)。特に、銀座ギャラリー青羅における展示は継続的なものとなり、ユニバーサルな展示の在り方を考える場となり、また、今後の彫刻芸術における触覚的イメージの研究を発信する場へと発展していくことが期待される。



【図 8】 静岡県小山町でのアートメダル展

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮坂 慎司, 羽室 陽森	4. 巻 413
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから"(15)空間の賑わい : 街中アートのメンテナンスを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 視覚障害 : その研究と情報	6. 最初と最後の頁 28-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮坂 慎司	4. 巻 169
2. 論文標題 「デジタル×アナログ」「触覚×視覚」から 迫る画像の魅力 : <共同研究 : 伝承のかたち「触れる」プロジェクト : 「3D プリント×伝統素材・技法」のアプローチから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 民博通信 Online = Minpaku Tsushin Online	6. 最初と最後の頁 14 ~ 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15021/00009888	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 宮坂 慎司	4. 巻 406
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから"(14)ヴァンジ彫刻庭園美術館が目指すユニバーサル	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 視覚障害 : その研究と情報	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮坂 慎司	4. 巻 22
2. 論文標題 原型制作の痕跡にみる「素材感が導く彫刻造形」に関する一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 彫刻研究誌 アートライブラリー	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂 慎司, 半田 こづえ, 武本 大志	4. 巻 402
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから"(13)触れるイメージの共有 : 多様な"触"体験へのアプローチ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 視覚障害 : その研究と情報	6. 最初と最後の頁 26-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂 慎司, 武本 大志	4. 巻 398
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから"(12)触れる鑑賞のニューノーマル	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 視覚障害 : その研究と情報	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 半田こづえ	4. 巻 No.394
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" 伝承に触れる・伝える試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 18-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 小松俊介	4. 巻 No.390
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" 手のひらの芸術、アートメダル	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 中臺久和巨	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" VRと触覚デバイス、アート体験の拡張	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 中臺久和巨	4. 巻 No.388
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" ミュージアムの未来へ、「路上」からの挑戦	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 半田こづえ	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" メトロポリタン美術館「Seeing Through Drawing」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 41-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 半田こづえ	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" メトロポリタン美術館「Picture This!」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 39-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 半田こづえ	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" The Noguchi Museumの教育普及プログラム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 30-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司, 半田こづえ	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" アメリカ・ニューヨークの触れるアート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 38-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司	4. 巻 No.389
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" 作家が案内する触れる鑑賞の現場	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 視覚障害 - その研究と情報	6. 最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司	4. 巻 NO.381
2. 論文標題 触れるアートの"いま"と"これから" イントロダクション「触れる鑑賞のこれまで」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊 視覚障害 - その研究と情報 -	6. 最初と最後の頁 16-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮坂慎司	4. 巻 NO.382
2. 論文標題 触れるアートの“いま”と“これから” 彫刻鑑賞タッチツアーの取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月刊 視覚障害 - その研究と情報 -	6. 最初と最後の頁 25-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 宮坂 慎司
2. 発表標題 《boolean 1.1》, モルタル・木, h.125cm × w.57cm × d.35cm
3. 学会等名 第51回日本彫刻会展覧会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮坂 慎司
2. 発表標題 《singing figure》, モルタル・木, h.167cm × w.53cm × d.31cm
3. 学会等名 第9回日展
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Miyasaka Shinji, McLeod Gary, 他
2. 発表標題 Between Dimensions: an alternative tactile approach for visually impaired art appreciation
3. 学会等名 ICOM Prague 2022- International Committee for Education and Cultural Action
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Handa Kozue, Takemoto Hiroshi, Atsumi Kei, Miyasaka Shinji
2. 発表標題 Material, Technique, and Distance: Preliminary Study of Tactile Aesthetics
3. 学会等名 Confronting Distance through Art and Design, Art and Design Session in TGSW2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 広瀬浩二郎, 栗山賀行, 宮坂 慎司
2. 発表標題 カタチにさわる時間
3. 学会等名 シンポジウム 彫刻をさわる時間 - 「さわる」と「みる」の結節点-
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Shinji MIYASAKA
2. 発表標題 The Relation between Japanese Art Medals and Sculpture, with a Focus on Churyo Sato
3. 学会等名 FIDEM TOKYO 2020 XXXVI FIDEM Congress (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮坂 慎司
2. 発表標題 触れる×アートメダル TAMP: つくばアートメダルプロジェクトの実践例より
3. 学会等名 公開シンポジウム: 彫刻をさわる時間 - 鑑賞の能動性が拓く未来 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮坂 慎司
2. 発表標題 booleam 1.0
3. 学会等名 第8回日展
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮坂 慎司
2. 発表標題 wrapped shell
3. 学会等名 第50回記念日本彫刻会展覧会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 つくばアートメダルプロジェクトー筑波大学附属視覚特別支援学校での取り組みー
3. 学会等名 インクルーシブ美術教育研究部会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮坂慎司, 半田こづえ
2. 発表標題 ミュージアム・アクセシビリティ リソースを活かした諸外国の取り組み
3. 学会等名 学びのバリアフリー 特定非営利活動法人石見銀山資料館（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 singin shell fragment -
3. 学会等名 改組新第7回日展
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 shell-
3. 学会等名 第49回日本彫刻会展覧会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 shell fragment
3. 学会等名 第69回千葉県美術展覧会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 Hardness- . . .
3. 学会等名 PROGRESSION: Medalllic art by Japanese artists
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 singing shell -
3. 学会等名 改組新第6回日展
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮坂慎司
2. 発表標題 かたちの硬度 . . .
3. 学会等名 第37回日本アートメダル展
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	半田 こづえ (Handa Kozue)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 INTERNATIONAL MEDALLIC ART EXHIBITION 2022	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 INTERNATIONAL MEDALLIC ART EXHIBITION 2021	開催年 2021年～2021年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------